

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

〔談話室〕 古代ギリシアにおける疫病の語り

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2023-02-05 キーワード: 作成者: 木原, 志乃, Kihara, Shino メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000583

古代ギリシアにおける疫病の語り

木原志乃

紀元前四三〇年夏、古代ギリシアのアテナイを襲った疫病については、その惨状がトゥキキュデイドス『歴史』(以下「*ヒストリア*」)に記されている。アテナイの総人口三〇万人の三分の一がこの疫病により死亡したとも伝えられ、人から人へ、遠くエジプトやペルシャなどを経由してグローバルな蔓延の様相も見せていた。文字通り「全ての(パン)人々(デーモス)」に広がった(*tráshnuc*)病いであつたと言えよう。このアテナイの疫病の正体は、ベストとも推測されたが、他にも天然痘か発疹チフス、デング熱、麦角中毒、麻疹等々諸説あり、未だ病名は確定されていない。感染者は、頭痛や様々な部位の炎症に襲われ、さらに嘔吐と下痢、痙攣等々に見舞われ、やがて高熱で一週間程度のうちに死亡する。運良く生き残った者も失明したり、各器官の機能が失われるなどの後遺症が残つたと言われている。重症化しやすく感染力の強い病いであつたため、「この疫病から生じ得る最も恐るべき現象は、患者から看病人へと病が燃えうつり、家畜の倒れるように人々が死んでいったことである。…ことに多少なりと人道に思いをいたす人びとは感染の危険をまぬかれえなかつた」(以下「久保正彰訳」と記述され、疫病による人と人とのつながりが断たれることの絶望についても語られていた。そして紀元前四二七年冬には第二波到来、この疫病の流行は人々の生活に再び暗い影を落とし、アテナイ社会の秩序を大きく揺るがせる要因ともなつた。

悲惨な疫病については、古代ギリシアの文学作品にも印象的に語られてきた。ホメロス『イリアス』は「怒りを歌え」(*μήνιν αἰεὶ*)と女神に語りかけるところから始まるが、この怒りによってアポロンがアカイア勢に疫病の矢を降らせることとなり、多数の兵士たちの屍体が野ざらしにされ、魂は冥界に連れ去られる惨状がもたらされるのである。また、ソポクレスのギリシア悲劇『オイディプス』の幕開けもテーバイで猛威を振るつた疫病についての描写であつた。オイディプスの台詞はこうである。「私は知っている。お前たちは皆病んでいることを。そしてお前たちの病いをもつ

てしても誰も私ほど病んではないことを」(S. 111)。これは疫病に苦しむテーバイにおける最大の病いの元が自分自身であったというオイディプスの絶望の言葉である。このような叙事詩や悲劇に描かれた疫病からもわかるように、人々は幾度も絶望や恐怖に晒されてきた。そして秩序の崩壊、心の荒廃を経験し、果ては病いを神々による禍いと見做してその穢れを払うことを人々は求めてきたのである。

一方で、「神聖な病い」と呼ばれてきた癩痢病には自然的原因があると分析し、病いを神的なものとしなしてきた当時の風潮を批判したのがヒッポクラテス医学派である。医学の祖であるヒッポクラテスの医学文書には『流行病 (Epidemia)』と題されたものが多数残されている。先のトゥキユデスの記録と比較すると、不思議なことにはこの医学文書には対人感染と免疫についての記述が見られない。猛威を振るったパンデミックには彼らの関心はなかったのだろうか。そもそもこの書は本来「流行病」と訳すべきでないとの指摘も見られる。すなわちこの語は「その土地の(エピ)人々(デーモス)を訪問した観察記録」というだけの意味として、その土地ごとに人々に広まった「風土病」のようなものの記録だったとも考えられるからである。そして、対人感染等の記述が不在なのは自覚的なことで、「穢れ」(μιασμα) に対する彼ら医学派の立場の表れとして理解すべきかもしれないとも指摘されている。すなわち悪で汚染されることを厭う集団心理を考慮して、当事者に責任のない災厄の汚染・伝染という捉え方を意図的に排除し、いたずらに恐怖心を煽る記述を避けたのかもしれないのである。そのように捉えれば病いと向き合う際の彼らの倫理観はある意味興味深い。しかも多くの臨床記録とともに、日頃から自己管理するように人々を啓蒙した彼らにとっては、その日々の養生法こそが(それにも限界があるといえようが)免疫低下に至らぬよう感染症予防の心得でもあっただろう。

それからすでに二五〇〇年が経過し、その間に人類は様々なパンデミックの危機と何度も向き合ってきた。新型コロナウイルスや感染症拡大防止のために、われわれは今また重大局面に置かれている。人との関わりを制限を余儀なくされ、社会や経済や教育のあり方も一気に変容することを強いられている。グローバル化の終焉を背景に、「感染症との戦いあるいは共存」の中で、日々の生活管理の必要性が打ち出されるときにも差別等の問題により積極的な対応が求められている。われわれは過去から何を学びうるか。古代ギリシアの時代から引き継がれてきた「病い」の語りは、トゥキユデイスの言うように、われわれの「永遠の財産」(κτῆν ἄεσθαι) となりうるのかを試されている。その限りではヒッポクラテスの言うように、人生は短くとも「医術の道は長く険し」(ἐν τέχνῃ μακρῇ) のである。

(古代ギリシア哲学・医学思想史)